異世界でゆるゆる生活を満喫す

3

Hazuki Yuna
著 葉月ゆな
絵 ガラスノ

登場人物紹介

ラファエル

しっかり者の
公爵家嫡男。

ホワイトドラゴン

悠久の時を生きる最強種。

ハルト

ウエストランド家の三男。
理想のゆるゆる生活を
満喫するため、
前世の知識を生かして
魔導具を開発していく。

???

謎のちびドラゴン。

アトレ

ハルトの従魔。超希少な
フェンリルの子供。

僕――リーンハルト・ウエストランドには前世の記憶がある。
日本という国で、生活していた時の記憶が部分的にあるだけだが……。
この異世界の生活で役立つことは、周囲の人たちの協力を得ながら活用していきたいと思っている。
でも、僕の希望はあくまで、仕事はほどほどにしてスローライフを送ることだ。
それなのに、最近はイベントに巻き込まれて忙しい日々を送っている。
例えば、魔力量、魔力レベルを見られるステータスボード――石板を見つけた際に訪れた王都で、突如現れた賢者神と会話をすることになった。
そこで、僕が得た加護「図書館」の詳細を知ることができたんだけど……。
それに、領内にある、エミニーラダンジョンへ行ったりもした。
そこでは、偶然友人のカナルと、冒険者パーティ、黄金の翼と遭遇(そうぐう)して、一緒にダンジョンに挑戦することになった。
途中から僕の従魔――アトレ、ジェラ兄様の従魔――リプカも討伐に加わり、新たな魔法を編み出しながら順調に進むことができたので、いい経験にはなった。
また、リプカの親が急に屋敷に現れ、領内に存在する世界樹へ連れていかれたこともある。

そこにいたのは、樹海を挟んだ隣国から逃れてきた傷だらけの獣人たちだった。
彼らとの話し合いの結果、領内に開拓村を作り、彼らはそこに住むことになる。
激レア魔獣のグラースホークが、父様の従魔になるというおまけ付きだ。
そんな中、獣人のリーダー格である狼獣人のラウールから、お米と香辛料、カレー粉のレシピ、そして2通の手紙を渡される。
お米もカレー粉も僕にとっては嬉しいものだったが、渡された2通の手紙を読んで僕の気分は沈んだ。
中身が日本語で書かれていたからだ。
書いてある内容を説明するためには、僕は内緒にしていた前世の記憶を、家族に告白しなければいけない。
悩んだ末の僕の決死の告白は、家族にあっさりと受け入れられた。
拍子抜けしつつも凄く安堵した。
それから母様もプルチーという魔獣――ルアンを従魔にした。

色々起こった問題もやっと一段落と思っていたら……また新たな問題が発生する。
僕がラファエルに気軽に渡した香辛料が育ったらしく、僕と父様はラファエルの実家である、クロンデール公爵領を訪れることになった。

第1話　クロンデール公爵領へ

クロンデール公爵家へ行くのは、僕、父様、ラウール、獣人のナタリア、僕付きの護衛騎士4人に、父様の従魔のシエル、そしてアトレだ。
汽車の中でのアトレは、僕の膝か、僕の隣の座席に置いたクッションのどちらかにいる。
シエルは父様の隣の座席にいたが、飽きると汽車の窓から出て、空を飛んでいた。
ジェラ兄様も行きたがったが、世界樹の精霊――アルラウネや獣人数名が我が家に滞在中だし、父様も不在になるため留守番になった。
クロンデール公爵と事業の話になったら、父様の出番だからね。
僕たちの訪問先は公爵領にある屋敷で、そこで公爵様本人と、その息子で僕の友人でもあるラファエルに会う。
でも事業の話がまとまれば、手続き関係ですぐに王都に向かうと聞いている。
クロンデール公爵領に着いたため、僕たちは汽車を降りて駅の改札を出る。
「父上、ハルトこっちだ」
クリス兄様が、改札前で護衛と共に待っていた。

「クリス兄様、学園を休んでもいいのですか？」
「こちらが優先だよ。ジェラがいないし、ハルトを止める人がいないとね」
やらかしている自覚はあるので何も言えません。
クリス兄様が護衛を連れてくるから、僕たちの護衛が少なかったのか。
すでにクロンデール公爵家から迎えが来ているので、3台の馬車に分かれて乗り込んだ。
シエルとクリス兄様の従魔――ビアンカは初対面なので、アトレがお互いを紹介している。
早速クリス兄様が僕に聞いてくる。
「カレー粉だっけ。私がウエストランドに戻った時には聞いていないし……まだ食べることもできていない」
「カレー粉がなかったからです」
元々手元にあったカレー粉が少量だったこと。
獣人たちの村で収穫できたらお披露目する予定だったことを伝え、言い訳をする。
ただ、クリス兄様は納得していない様子なので、「公爵領にあるダンジョンで、カレー粉の元となる香辛料が育ったのであれば、今回食べられるはずです」と言って、必死にご機嫌を取った。
「父上やジェラは食べていて、私と母上が食べていないわけだが……だから報告会でジェラは話をしなかったのだな」
この世界でも、前世同様に食べ物の恨みは怖いみたいだ。

今回、何としてもカレー粉を完成させて、ラファエルから分けてもらい、母様へのお土産（みやげ）にしよう。
あとジェラ兄様ごめんなさい。
クリス兄様から何かしら報復があるかもしれません、と心の中で手を合わせて謝った。
馬車が止まったので、クロンデール公爵家に着いたようだ。
王都で訪問した公爵家の別邸よりは小さく感じるが、奥行きがあるので、規模は同じくらいかもしれない。
屋敷の手前には噴水と庭園があり、見応えは十分だ。
王都の屋敷とは違った趣で、さすがは公爵家といったところか。
ラファエルが出迎えに来てくれ、父様と軽く挨拶したあとに用件を話し出す。
「本来なら、一度休息を取っていただくのですが、今回はこのまま父の元に案内させてください。どうしてもこのあとの都合が合わなかったようなのです。こちらから申し出た話なのに、申し訳ございません」
「急なことでしたから大丈夫ですよ」
父様がラファエルにそう返事をした。
ラファエルは公爵令息として、来客への対応がスマートだ。
同じ年齢なのに、僕との違いは何だろう。

部分的とはいえ前世の記憶がある僕だが、精神年齢は体に引きずられている感じなんだよね。
そのこともあって、余計に凄いと思ってしまう。
僕たちは歩き出した父様たちのあとをついていく。
僕たちが案内された部屋は豪華な応接室だ。
中央に大きな楕円形のテーブルがあり、それを囲むように椅子（いす）やソファーがほど良い間隔で置かれている。
父様は一人掛けの椅子に座り、シエルは父様の肩にとまった。
僕とクリス兄様は大きめのソファーに案内された。
アトレとビアンカがいるからだろう。
僕付きの護衛騎士であるマイヤーとハミルトン、獣人のラウールとナタリアは、僕たちのソファーの後ろに立つ。
残りの護衛騎士、ウィルソンとカムエラは、応接室の外で待機だ。
少ししてクロンデール公爵が入室してきた。
「長旅で疲れているところ、早速本題に入る形で申し訳ない。ダンジョンで栽培に成功した香辛料だが、どのように採取すればいいかわからない。悪いがダンジョンに行き指導をしてほしい。そして香辛料を使った料理を食してから、新事業の話を進めたい」
「全く問題ないです。こちらからダンジョンに同行する者は、私以外のこの応接室にいる者と、部

屋の外で待機している2名の計8名です。それぞれの従魔も同行します」
父上がクロンデール公爵の提案に同意した。
「公爵家からは、口の堅い騎士5名をラファエルの護衛として同行させる。獣人の2人は注目を集めたくなければフードを用意させるが……どうする？」
クロンデール公爵の問いを受け、父上がラウールとナタリアに「返事をして良い」と伝える。
2人の返答としては、フードは不要だそうだ。
ここに来るまでにもフードをかぶらなかったし、ウエストランド家の侍従の制服を着ているから問題ないだろうとのことだった。
フードをかぶって、僕たちに同行する方が目立って怪しいかもね。
「詳細はラファエルと詰めてほしい」
クロンデール公爵はそう言うと、応接室を出ていった。
本当に忙しそうだ。
もし嘘だったら、真面目なラファエルが黙っていないだろうし。
僕たちは、ラファエルから今後の予定を聞く。
ダンジョンには、明日から1泊2日かけて行くようだ。
ここからダンジョンまでは、馬車で片道2時間ほど。
また、今回はダンジョンの5階層に行くことが目的のため、4階層までは戦闘を最低限にしなが

ら、最短距離を進むようだ。
一度でもクリアしたことのある階層はスキップできるが、このダンジョンが初めての僕たちがいるから、今回は1階層から進むしかない。
ラファエルに「明日までゆっくり過ごしてほしい」と言われ、僕たちは別れた。

翌日、早朝に集合した僕たちは馬車に乗り込み、ダンジョンを目指す。
到着して降り立った場所には建物が立ち並び、とても賑わっていた。
ただ、ダンジョンの入り口らしきものは見当たらない。
念入りに観察すると、1か所だけ冒険者たちが集まっている場所があった。
ラファエルの説明によると、そこがダンジョンへの入り口らしい。
入り口にある列に並びながら、ラファエルから説明を受ける。
ここにあるダンジョンは山とか洞窟とかが入り口ではなく、単純に地上から地下に潜っていくタイプのダンジョンだそうだ。
周辺の建物は、冒険者相手の商売をしている店やギルドらしい。
そしてこのダンジョン、通称「薬草と果物のダンジョン」は、今まで一度もスタンピード――魔獣がダンジョンから溢れ、人々を襲うこと――が起こったことがなく、ダンジョン内の魔獣も高ランクではないため、年々周囲に住む人が増えているとか。

ダンジョンで採れた薬草は薬局ギルド、果物は商業ギルドに卸される。
冒険者ギルドでは、各ギルドからリクエストがあった分だけ対応するようだ。
冒険者の数と採れる品物の量が多いので、役割分担をしているらしい。
量が多いとはいっても、王都周辺以外でも消費されるから供給過多ではないとのことだった。
この世界には、中の時間が止まるマジックバッグもあるからね。
ここで僕たちの順番になったため、ダンジョンへ潜る。

このダンジョンは奇数階層に薬草が自生していて、偶数階層に果物が生えている。
1階層に足を踏み入れると薬草が茂っていた。
このあたりの薬草は、切り傷などに使うもので、奥にいくと軟膏に使える油が採れる。
この階層には、モグラに似た魔獣――トープが生息している。
好戦的ではないので、落とし穴に気をつけていれば特に心配はないとのことだった。
最短距離を進んで2階層へ。
なんとこのダンジョンは、4階層まで、強大な敵が出現するボス部屋がないらしい。
2階層はリンーゴ、ミカーン、レモーンが木々に実っていた。
また、この階層は、クレーエと呼ばれる真っ黒な鳥や、ピピトと呼ばれる褐色の鳥の魔獣がいる。
果物の採取中には集団で襲ってくるが、採取しなければ襲ってこないとのことだ。

少し先に鳥の集団がいるのが見える。
冒険者たちが果物を採取中なのだろう。
今日は果物を採取せずに最短距離を進んでいく。
たどり着いた3階層には森が広がっていた。
この階層では頭痛薬や痛み止めに使う薬草が採れるらしい。
そして、ゴブリンが突然現れ、襲ってくるようだ。
本来であれば、薬草を採取する者と見張りする者に分かれて対応するのだが……。
今回は採取をしないため、ゴブリンが現れれば、僕、アトレ、ビアンカ、シエルで対応して前に進んだ。
シエルは、父様にダンジョンに行きたいと伝えて、僕たちについてきている。
「私が対応する間もなく討伐が終わる」
ラファエルが僕の横で、愚痴交じりに呟いた。
アトレたちの反応が早くて、僕もゴブリンは1匹も倒せなかった。
「たまには譲って！」
僕がアトレたちにそうお願いしてから、従魔たちは僕が討ち漏らした敵だけを狙ってくれるようになった。
お願いしなかったら、ずっとラファエルと同じだったよ。

4階層も森だが、気温が夏になった。
木陰にいればまだましだけれど、とにかく蒸し暑い。
ここは果物のバナーナ、モーモ、ナップルが採れる。
マンキーやモーノと呼ばれる、猿に似た魔獣がいて、採取時だけ集団で襲ってくるようだ。
この階層からボス部屋がある。
僕たちが早々にボス部屋にたどり着くと、そこにはゴリィと呼ばれるゴリラに似た魔獣が、10匹いた。
ゴリィは体毛が堅く、安い鉄の剣で戦うと剣が折れるそうだ。
ゴリィの討伐では魔法を使うのが一般的らしく、ラファエルと僕、アトレ、ビアンカ、シエルで対応することになった。
ラファエル付きの護衛騎士たちは、アトレたちの強さを間近で見ているので、特に反対の声は上がらなかった。
ゴリィを討伐したあとに残ったドロップ品は、果物のマンーゴが入った木箱が2箱だった。
6階層に自生しているマンーゴの質を高くしたものとのことだ。
今日はここまでで、5階層の入り口前にテントを張る。
野営の訓練も兼ねて、今回もダンジョンに泊まることにしたのだ。
夕食を取りながら、ラファエルに5階層以降も挑戦しないかと尋ねる。

このダンジョンは、僕が行ったエミニーラダンジョンより難しくないから、もっと上の階層にチャレンジできると思ったのだ。
護衛騎士の冒険者ランクが低いため無理だ、とラファエルからの返答がある。
公爵家の騎士は護衛と警備が中心で、魔獣の討伐はほとんど行わない。
領内に出るのはゴブリンくらいで、騎士団が討伐する必要がないそうだ。
それなら騎士たちのランクが上がらないのは納得だ。
ウエストランド領の騎士の仕事に護衛はあるけれど、メインは討伐。
やはり各領地で違いが出るものだね。
ただ何かあった時のために冒険者登録はしているので、冒険者ランクはEかFなのだとか。
このダンジョンの最終階層までいくために必要な冒険者ランクはD。
この領地にあるもう1つのダンジョンの最終階層まで行くなら、Cランクが必要だ。

翌日、目的の5階層へ。
気温は引き続き暑いが、風景は草原に近い感じだった。
ここではマンティスと呼ばれる魔獣が出没する。
見た目はカマキリそのものだが大きさが違う。
体高は僕よりも大きいのだ。

僕、クリス兄様、アトレ、ビアンカ、シエルで、マンティスが現れる度に討伐していく。
ナタリア、ラウール、ラファエル、そして僕とラファエルの護衛騎士たちは、ナタリアからカレー粉の材料に必要な香辛料を教えてもらい、採取していた。
研究のための見本で、どの品種も数本、根元から採って持って帰るらしい。
ラファエルが以前、使い道が不明だと言っていた黄色い根っこは、ターメリックだった。
もし違ったらカレー粉が作れないので……ホッとした。
討伐組は戦力過多だということがわかり、途中から僕やクリス兄様も採取を手伝うことになった。
僕は採取を始めてすぐに自分の籠を見る。
1つ1つ手で採取しているので、少ししか取れない。
このままでは、母様へのお土産分のカレー粉が確保できないではないか……。
母様を怒らせるわけにはいかないので、何としてもカレー粉のお土産が必要なのだ!!
ナタリアに、カレー粉を作るのにはどの部位が必要か確認すると、ターメリック以外は、実や種子の部分が必要だったことが判明する。
少し考えて、風魔法と防御魔法を採取に使うことを思いついた。
クリス兄様に僕の考えを話し、許可をもらう。
ただ、大失敗したらいけないので、狭い範囲で実験する。
まず、実の部分の下に、防御魔法を薄く広げたものを展開する。

そしてクリス兄様の風魔法で刈っていく。
あとは、広げた防御魔法に角度をつけ、実が僕たちのそばに転がってくるようにする。
実際にやってみると、上手くコントロールできずに、一部が地面に落ちてしまった。
「一部が零れ落ちただけだから成功だよ」
クリス兄様が褒めてくれるが、僕としては全部回収したい。
「風魔法で一か所に集めたらどうですか？」
マイヤーが風魔法で集めることを提案してきた。
たしかにマイヤーの案なら、僕に負担がかからず、無駄なく回収できそうだ。
マイヤーの提案を実践すると、簡単に回収することができた。
そこから僕が防御魔法を広げては、クリス兄様やマイヤーが風魔法で刈って、僕たちに近い場所に集めてから、みんなで袋詰めしていった。
「全部回収してもいいのかい？」
袋詰めを手伝ってくれたラファエルが、そう質問してきた。
「今回は全部刈って、実がなるのに何日かかるのかを調べると良いと思う。少し残したら生えてくるスピードが変わる、とかもありそう。一番効率がいい方法を研究したら良いと思う」
僕はそう答えつつ、回収した種をこのエリアに蒔(ま)いて、収穫量を増やすべきだと伝える。
「この階層を有効活用するためには必要なことだね。必ずするよ」

ラファエルが責任をもって行うと約束してくれた。
カレー粉に必要なものをすべて回収して満足していた僕だが、アトレたちが見当たらないことに気づき、周囲を探し始める。
僕が周囲を見回していることに気づいたクリス兄様が口を開いた。
「ビアンカたちは、他のところで討伐をしてくると言っていたよ。この辺はラウールや護衛騎士たちでも対応できるから」
そういえば、前のダンジョン攻略から戻った際に、アトレは「もっと討伐したかった」と拗(す)ねていた。
「アトレー、ビアンカー、シエルー。戻るから帰っておいでー」
僕が大きな声で叫ぶと、みんな戻ってきた。
いい子たちだ。

ダンジョンからの帰り道、馬車の中でラファエルが僕に質問してくる。
「リーンハルト、今回の回収方法を詳しく教えてほしい」
僕は、広げた布を防御魔法で再現したこと、風魔法で刈って一か所にまとめたことを説明した。
「なるほど。5階層は全部カレー粉の材料で埋め尽くす予定だ。だから、我が家の騎士たちにリーンハルトが見付けた回収方法を覚えさせてもいいだろうか？」

カレー粉がたくさん出回ってくれる方がいいから、了承した。

公爵家に戻ると、早速カレー粉作りが始まる。

ナタリアの指示で、カレー粉に必要な材料を奇麗に洗ってから乾かす。

時間を短縮するため、乾燥は風魔法で終わらせた。

乾燥後は、種子や実を石臼でゴリゴリと潰して、粉末にする。

なんて力仕事なんだ。

僕は作業を見ているだけだが、クロンデール公爵家の騎士たちは大変そうだ。

今後は専用の魔導具の開発が必要だろうから、ラファエルに頑張ってもらおう。

それぞれの粉末ができたところで、僕は配合の割合が記載されているメモを取り出し、その通りに混ぜていく。

ちなみに、獣人の女の子からもらった日本語で書かれた原本ではなく、この国の言葉に書き直したものを持参している。

完成したものの匂いを嗅ぐとカレー粉だった。

次はカレー粉を使って料理をするため、クロンデール公爵家の調理場に移動する。

クロンデール公爵家の料理長に、カレースープの作り方と、串に刺した肉にカレー粉をまぶしたものの作り方を伝えた。

料理長から、串に刺した肉をそのまま出すことに難色を示され、串を利用しない調理方法に変更した。

料理長にカレー粉を手渡すと、色を見て一瞬心配そうな顔をしたが、ラファエルもいたので、何も言わずに調理に取りかかってくれる。

僕たちは邪魔にならないところで話をしながら、料理ができるのを待つ。

しばらくすると、カレーの匂いが調理場に充満し始めた。

あぁ、カレーライスやカレーパンが食べたい……。

前世の記憶を持つ獣人の女の子、カレーパンの作り方知らないかな？

でも連絡手段がないから厳しいか。

以前手に入れたお米が、獣人たちの暮らすヘリオス村で収穫できたら、絶対カレーライスを食べると僕は決意する。

「この匂いは食欲をそそるね」

クリス兄様の言葉に僕は同意する。

「見た目で躊躇する人もいると思うのですが、この匂いには負けるはずです」

料理長が、完成したカレースープと肉をお皿によそって持ってくる。

「味の確認はしましたが……問題ないか確認をお願いできますか？」

僕は料理長が差し出したお皿を受け取り、切り分けられている肉の一切れを食べる。

さすがクロンデール公爵家の料理長。
お肉の柔らかさ、焼き加減はほど良く、最高に美味しい。
今度はスープを一口飲む。
ちょっとピリッとするが、仄かに甘みもあって、こちらも美味しい。
「初めて作るのにこのクオリティ……さすがクロンデール公爵家の料理長ですね」
僕は絶賛した。
両方の料理の味見をしたラファエルとクリス兄様も、絶賛する。
料理長は嬉しそうだ。
カレー粉料理の研究を料理長に任せて、僕たちは調理場をあとにした。

僕とクリス兄様は、ラファエルに、庭の景色が一望できる2階の客間に案内された。
「リーンハルト、先ほどの料理は流行ると思う。ありがとう」
ラファエルが頭を下げてきた。
公爵家の令息が深々と頭を下げるなんて、執事や侍女がいたら驚かれるよ。
「頭を下げてもらうほどの――」
「リーンハルトは、事の重大さをわかっていない！」
ラファエルは真剣な顔つきだった。

今まで活用を見いだせなかった階層を活性化できること。
さらにカレー粉が国中に広まれば、莫大な利益を手にできることを説明される。
カレー粉を使えば簡単に美味しく食べることができるし、本体の持ち運びも楽だ。
ラファエルから売れないわけがないと断言されてしまう。
「ラファエル様の言う通りだよ。ハルトも売れると確信したから、獣人たちだけでカレー粉を作るのはリスクが高いと判断して、提案したのだろう」
クリス兄様は僕がラファエルに提案した理由を言い当てた。
そーなのだけれどー。
ただ、僕が何かするたびに話が大きくなっていくのはなぜだろうか？

夕食の最初に、カレー粉をまぶして焼いたお肉と、カレースープが出てきた。
クロンデール公爵が早く試食したいと希望したそうだ。
ちなみに僕が試食した時よりもさらに美味しくなっていた。
さすがは公爵家の料理長だと感心していたら、クロンデール公爵がおかわりをしていた。
「話は食後にするとしよう」
僕と目があったクロンデール公爵が、まずは食事を促した。

食後、みんなで応接室に移動すると、クロンデール公爵が口を開く。
「お礼を言わせてほしい。今まで活用できていなかった5階層で、莫大な収益が見込める。そしてこの事業を当家に持ちかけてくれたことに感謝する」
クロンデール公爵に頭を下げられてしまい、父様が慌てていた。
父様がカレー粉を手に入れた経緯を説明し出す。
獣人たちが持ち込んだ香辛料は、本来暖かい地域で栽培されるもので、この国での栽培は難しいものだったこと。
ただ獣人の中に植物神の加護持ちが数人いて、彼らはどこの土地でも育てることができること。
そうはいっても、我が家の事業にするには、リスクが大きくて躊躇していたということ。
僕がラファエルから果物と薬草のダンジョンの話を聞き、試してもらったところまでを一気に話してくれた。
話を聞き終えたクロンデール公爵が、父様に質問をしてくる。
「では、このカレー粉は獣人の国で流通しているものなのか？」
「そうではないようです。彼らを陰で援助していた獣人の国の貴族令嬢が考案したようです。このレシピを交換条件に、獣人たちの保護を求めていました。ただこのレシピは、信頼できると認めた人に渡すようにと約束していたそうです」
「信頼できる人というのは、リーンハルト君かな」

「……」
父様は黙ったままだ。
だんまりは認めたことと同じだよ、父様。
「まぁ、いい。詳細はこれから話し合うとして、要望はあるかね」
「要望は2つです」
父様からクロンデール公爵に要望を伝える。
1つ目は、獣人たちが穏やかに普通に生活できること。
2つ目は、カレー粉は庶民でも買える価格設定にしてほしいということ。
「最初は高くして、流通量が増えてから下げていく方がいいのではないか？」
クロンデール公爵がそう言うが、僕としては誰でも食べられるようにしてほしいから譲れない。
冒険者や国中を旅してまわる商人が、少しでも野宿の際に美味しいものを食べてほしいからだ。
カレー粉を高く売りつける商人とかが出てきそうだが、そこは公爵家で取り締まってもらえればと思う。
「父上、ダンジョン内での香辛料の収穫量次第ですが、庶民でも買える価格設定はできると思います。今日リーンハルトが、効率よく収穫する方法を見せてくれました」
ラファエルが僕たちの案を支持してくれた。
父様が僕を見て何をしたのだと目で訴えてくるので、僕は目をそらす。

「それは面白そうだ。ぜひ見たかったね。ということは、5階層にあったすべての香辛料を採取してきたということかな？」
クロンデール公爵が面白そうな顔で僕を見ているが、僕は何も喋りません。
代わりにラファエルが答える。
「そうです。今回だけでどれくらいのカレー粉が作れるのかを試せますし、種もたくさん採れましたから、さらに5階層に蒔きます」
ラファエルの話を聞いたクロンデール公爵が、僕に話を振ってくる。
「リーンハルト君、君からも要望があるかい？」
「お土産に、カレー粉が入った瓶が5つほど欲しいです」
クロンデール公爵の問いに僕が即答すると、クロンデール公爵が目を丸くする。
「それだけでいいのかい。他には？」
「ないです」
あとは父様と話し合ってください。
僕はお土産が確保できただけで満足です。

◇　◇　◇

ウエストランドの親子が退出して、私と息子のラファエルだけになる。

「ラファエル、この事業はお前が中心になって進めなさい」
「父上、また私に仕事を押しつけようとするのですか!!」
ラファエルが目を細めて私を睨んだ。
「そうではない。リーンハルト君を守るためでもある。我々はウエストランド家に大きな借りができたからな」
「どういうことでしょうか？」
このままだとリーンハルト君だけが目立ってしまう。
今回の事業をラファエルが指揮して成功させれば、彼への注目度が少しは下がるだろう。
ウエストランド家は、リーンハルト君のことをできるだけ隠したいようだ。
本人が自由気ままに動き、利益を生む新事業を起こしているから、まったく隠しきれていないが……。
ラファエルに、友人に借りを作りたくなければ、お前がこの新事業を見つけ出してきたと思わせるくらい動くように、と助言する。
そして、獣人とリーンハルト君には単に協力してもらっているだけだと、世間を騙すこと。
最後に、今後リーンハルト君を助けられるだけの力をつけるようにと諭した。
賢い息子はこれで理解するだろう。
しかし、ここまで莫大な利益を得られるであろう新事業を提案されたら……気になってはいたが、

リーンハルト君の加護について調べることは控えるべきだろうな。
残念だが仕方ない。
ただ、リーンハルト君が賢者神に本探しを頼まれた件に関しては、こちらも協力すると約束したから、我が家の図書室を使用してもらい……司書に彼が何の本を読んだのかを確認するくらいはいいだろう。

◇　◇　◇

翌日、父様とクリス兄様が、クロンデール公爵たちと新事業の詳細を詰める間、僕――リーンハルトは公爵家の図書室に案内された。
やはりクロンデール公爵も貴族だね。
賢者神と関わりたいという自分の野望を、さりげなく実現しようとしてくるのだから。
まぁ、僕も公爵家の図書室に興味あるからいいけれど……。
公爵家の図書室は、サイズ的には図書館だった。
建物一棟分の図書室って凄いな。
案内してくれている侍従さんの話だと、代々本好きな家系で、増えていく本の置き場所がなくなったので専用の建物ができたということらしい。
「詳しいことは司書にお尋ねください。昼食前に参ります」

侍従さんは説明を終えると本館に戻っていった。
中に入ると司書さんが待っていて、図書室の説明をしてくれる。
受付で名前と入館時間を書き、帰りに退出時間を書くらしい。
本の持ち出しも受付をすれば可能とのことだ。
公爵家の従業員は出入り自由らしく、それなりに人の出入りがあるみたい。
僕は公爵家の客なので、個室へ案内された。
個室は日当たりがよく、窓際には一人掛けのソファーと机、壁には勉強机、中央には寝転べそうなソファー、本やカップを置ける丸テーブルがあった。
僕が屋敷で気に入っている温室並みに、快適に過ごせそうだ。
「興味があるジャンルの棚まで、ご案内しましょうか？」
「一通り自由に見て回りたいからいいよ」
僕は司書さんの申し出を断った。
図書館内の飲食は禁止だが、この部屋内ではお茶ができるそうだ。
もし必要な時は、青い腕章をつけている者が司書だから、声をかけてほしいとのことだった。
読んだ本は自分で元に戻さずに受付に返すルールのようだ。
違う場所に本を戻すのを防ぐためらしい。
司書さんは注意事項を話し終えると部屋を出ていった。

僕は早速内部を見て回る。
学問書、歴史書、美術書、大衆小説。
そして他国の本も一角を占めるほどある。
図書室の本はとにかくジャンルが多彩で、王都図書館並みに充実していた。
他国の本を一冊手に取ってみたら、なぜか中身が日本語だった。
確認のため他の本も手に取る。
外国語で書かれているはずの本なのに、中を見るとこちらも日本語だ。
加護のおかげだろうか？
読みたいが、ここで読むのはやばい気がする。
他国の本を読んでいるところをクロンデール公爵に知られたら、めんどくさいことになりそうな気がするから、やめよう。
他国の書籍がある本棚から離れ、他を見て回る。
ユニークなところではこの国のダンジョンをまとめた本や、この国の魔獣分布に関する本、郷土料理の本、名産品をまとめた本など、僕も知っておいた方がいいような本もあった。
あとは魔法に関しての本も多かった。
全属性の初級編から上級編まで揃っている。

僕は水魔法と回復魔法の中級編2冊と、聖女に関する本3冊の計5冊を持って戻る。
ここでも5冊を1時間ほどで読んでしまった。
賢者神の加護：図書館は、王都図書館の本だけでなく、蔵書が多い場所で読む本であれば、速読の効果が発動するのだろうか？
我が家の図書室の本は、少し早く読める程度だったが……。
僕はちょっと気になり、ステータスボード――石板にいつの間にか導入されていた検索画面で、【加護：図書館の発動条件】で検索する。

【加護：図書館】現在のランク：E
発動条件：効果を発動させる図書館の蔵書が1万冊以上あること
①その図書館にある本はどの言語でも読むことができる。
②その図書館の本を石板に取り込むことができる。
遠隔で取り込めるようになる図書館の数が、ランクアップごとに1つ増える。
ただしこの効果はDランクから。
（おまけ）検索ボタンは君の前の世界のものを真似てみた。
ただし回答できる問いにのみ答えるよ。

いつの間にかEランクになっていた。
ランクアップしましたと、アナウンスが流れなかったよ。
もしかして僕が、毎回はやめてほしいなって思ったから、神様が変更してくれたとか？
そして、Eランクの特典が①かな？
そして②はDランクの特典だろうか。
賢者神は、特典の解放条件に関しては、面白くないから事前に教えないと言ってたっけ。
あとおまけには驚いたが、今後困りごとができたら検索できるから、嬉しい機能だ。
ピロローン。
音とともにメッセージが届いた。
【もっと頻繁に石板を開きましょう。魔力レベル・魔力量の確認もすること。加護：図書館の②の特典を公開したのは、聖女に関する本を読んだためです】
僕が読んだ聖女の本はいくつかある。
食べられる野菜や果物を発掘した経緯や料理について書かれていた本。
多くの問題を抱えていた鉄道を、いかにして完成させたかを物語風に書いた本。
聖女がこの国に現れてから亡くなるまでの一生を書いた本。
いったいどの本が、特典に加味されるものだったのだろうか？
怪しいのは聖女の一生についての本かな。

ここでもう一度読み直してみよう。
『聖女は、呪いに侵された不毛の土地と、狂暴化した魔獣を浄化するため神に遣わされた』
読み返してみて、この一文が引っかかる。
獣人の国に聖女が現れたということは、土地が呪いに侵されていて、魔獣が狂暴化していると考えられる。
ラウールたちが住んでいた場所は、狂暴な魔獣が多くいるエリアと言っていたな。
住んでいたところが元からそうなのか、その場所に移動させられたのかを確認する必要がある。
あとで父様に相談してから、ラウールたちに聞いてみることにしよう。
難しいことは相談してから考えることにして、メールで指示された魔力レベルと魔力量を確認する。

魔力レベル　：水18・回復10
魔力量　　：9834

あれ？　水の魔力レベルも、回復の魔力レベルも上がって、魔力量も増えている。
2回目のダンジョンに行ってから2か月の間で、何かしたっけ？

回復が大幅に増えていたことは喜ぼう。
回復のレベルを上げましょうと石板に書かれていたからね。
考え事をしていたら、侍従さんが呼びに来た。
お昼になったみたいだ。
僕は本を受付に返して、図書室を出る。

食堂に行くと、クリス兄様とラファエルがすでにいて、ラファエルから声がかかる。
「リーンハルト、冒険者ギルドから連絡があった。ダンジョンの5階層、もう収穫可能だそうだ。だから昼食後、ダンジョンに行って、一気に収穫できる仕方を公爵家の騎士たちに指導してほしい」
「今から？」
僕がクリス兄様を見ると、クリス兄様は頷(うなず)く。
「私も一緒に行くから大丈夫だ」
「クリス兄様、学園をさらに休ませてごめんなさい」
「我が家の新規事業の話だ。私も知っておかないといけないことだからね」
僕たちは早速ダンジョンの5階層に行って、僕とクリス兄様で昨日の収穫方法を騎士たちの前で

実演した。
今後の収穫作業は公爵家の騎士たちがするため、コツをつかむまで指導する。
収穫作業の間、ラファエル、ナタリア、ラウールは、別の公爵家の騎士たちと、種を蒔く範囲を決めている。
アトレ、ビアンカ、シエルは討伐に行っていてここにはいない。
みんな時間を有効に使い作業を進めていった。

作業を終えた翌日、再び5階層を確認すると、香辛料は収穫できる状態だった。
僕の隣にいたクリス兄様が口を開く。
「これでカレー粉の低価格設定の目処が付いたね」
この広い5階層に香辛料の種を蒔けば、さらに収穫量は増える。
いつでも手に入るくらい流通してほしい。
みんなで手分けして収穫した後、僕たちは公爵家に戻って、クロンデール公爵と父様に報告した。
慌ただしいが、昼食後王都へ行き、新事業の申請を王城に提出するようだ。
クリス兄様が教えてくれたけれど、貴族が新事業を始める場合、国に申請しなければならないらしい。
国に影響ある事業だった場合や、何か起こった場合に国が素早く動くためだそうだ。

建前はそうでも、ある一定の貴族だけに利益や権力が集中しないようにするためとかはありそう。
それか、利益の見込める事業に王家も参入したいからだろうな。
まぁ、難しいことは父様とクリス兄様に任せておけば安心だ。

第2話　もらっていくよ

僕は王都のウエストランドの屋敷に戻ってきて、ひと息ついたところだ。
父様とクリス兄様は王城に行っている。
クロンデール公爵から図書室のことについて聞かれなかったのは良かった。
新事業の件が忙しいのだろう。
父様とクリス兄様には相談があると話しているから、戻ってきたら時間を取ってくれるはずだ。

夕食後、父様の書斎に3人で集まると、父様に話すように促される。
昨日の公爵家で気づいた新しい加護の能力。
そして、聖女の本を読んだ際、ある一文が心に引っかかったことを一気に話した。
「ハルトの懸念は、獣人の国が我が国の150年前と同じ状態かもしれないということかな？」

「クリス兄様、ラウールたちが以前住んでいたところは、樹海の中でも、狂暴な魔獣が多いエリアだったと聞いています」
僕たちの話を聞いていた父様は、ラウールに明日確認しようと言ってくれた。
「父上、ドラゴンが樹海に居座ったことによって起こっていることを指している可能性はないでしょうか？」
「それならば、聖女がなぜ獣人の国に降臨したのだ」
クリス兄様の考えに、父様が矛盾していないかと疑問を投げかけた。
「この国にはハルトがいます。ハルトに神の加護が３つあること、神からのメッセージが届くことで説明できませんか？　獣人の国にも神が心配する問題があるのだとは思いますが……」
「判断は、ラウールたちに聞いてからだ」
父様はクリス兄様の考えについては言葉を濁した。
たしかに僕には加護が３つあり、賢者神と会話したし、神からメッセージも来る。
聖女を我が国に降臨させられないから、前世の記憶を持つ僕に、ドラゴンを倒す対価として力を与えたという説はあり得る。
個人的には納得したくない話だけれど……。
続く父様からの話は、クロンデール公爵家との共同事業の話だった。
獣人が持ち込んだ調味料とは発表せずに、ダンジョンのボス部屋で発見された種とメモによって

開発された調味料ということにするらしい。
獣人の作ったカレー粉は、クロンデール公爵家を通さなくても販売を認めるが、販売価格は同じに設定するようだ。
そして獣人たちが村で栽培することについては「植物神の加護を持つ者が多いため、クロンデール公爵家が依頼している」ということにするそうだ。
これなら獣人たちが香辛料を育てていても不思議ではないし、利益率は低いから、獣人への関心は高まらないだろう。
「ただ、別の仕事でクロンデール公爵家の２人がウエストランドに来ていたし……クリスやハルトが薬草と果物のダンジョンに出入りしていたことは調べればわかる。勘のいい貴族は騙せないが世間的にはこれで押し通す」
父様の最後の話は聞かなかったことにしよう。
貴族同士の駆け引きなど煩わしいことは、嫡男のクリス兄様が対応してくれるだろうから。
翌日、ラウールたちに獣人国での住まいについて聞くと、元から住んでいた場所らしかった。
近辺にいる魔獣は元から強いが、この数年更に狂暴化していて討伐は大変だったとか。
魔獣の素材は食料などと交換できる唯一の資金源だったし、放置すると村が危機に晒されるため、討伐しないという選択肢はなかったらしい。

呪われた土地についてはわからないとのことだった。
「ラウール、魔獣が狂暴化した原因はわかっていたの？　あとヘリオス村の近くの樹海と比べるとどうなのかな」
僕の質問に対するラウールの返答は、狂暴化の原因は不明で、徐々に狂暴化する魔獣が増えていったとのことだ。
また、ヘリオス村の近くの方が格段に過ごしやすいそうだ。
僕と一緒に話を聞いていたクリス兄様が話し出す。
「ラウールたちみたいに住む場所を決められていた人たちは、他にもいたのか？」
「俺たちとは違った理由で決められてた場所が数か所あると聞いています。俺たちは陰で援助してくれる人がいたので、まだましだったのではと思っています」
樹海に異変が起きていて、獣人国とアランフェス王国両方で魔獣の狂暴化が始まっているということかもしれない。
樹海と面しているのは2か国のみだ。
他の国々は山脈で分断されているから関係ない。
クリス兄様の憶測が当たっているような気がしてきた。
ウエストランドの樹海に居座っているというドラゴンに、僕は会いに行かないといけないようだ。

夕方、我が家の食堂でダヴィト伯父様に会った。
この伯父様、いつも突然来るな。
「リーンハルト、また色々しでかしているね。少しは自重しようとしないのか！」
おっと、これはお説教モードでしょうか？
僕だってしたくてしているわけではないと反論したいが、凄くお世話になっているから、無難に返しておく。
「ご迷惑をおかけしています」
夕食の際はこれだけで終わったが、居間で身内だけになると、ダヴィト伯父様が話を蒸し返してくる。
「リーンハルトは私を過労死させたいのかい」
「義兄上、言いたくなる気持ちもわかりますが……」
父様、僕をかばってくれないの？
「ハルトも迷惑をかけたくてしているわけではないのですから」
ここでもクリス兄様は味方なようです。
「これくらいの嫌味で終わらせるのだからたいしたことないだろう。今度はクロンデール公爵家を巻き込んで何をしているのだ。クリスフォードに学園まで休ませて」

「もうご存じなのですか？　新事業の申請は昨日の夕方ですよ」
父様が驚きを隠せないでいた。
「私はティーバッグ事業、かわら版事業、獣人の保護で協力しているのだから、ウエストランドへの貢献度は高い。今回の新事業のことを詳しく聞く権利はあるよ」
父様は獣人が持ち込んだカレー粉の話と、クロンデール公爵家のダンジョンでの話を伝える。
「そのカレー粉を使った料理を今食べたいな」
ダヴィト伯父様のリクエストで、急遽カレースープと串肉を作ってもらうように、僕が料理長に頼みに行くことになった。
さっき夕食を食べたばかりだし、伯父様を説得しようとすると――。
「リーンハルト、これくらいのわがままは聞いてほしいよ」
僕が反論できないようにそう言ってきた。
仕方ないから素直に調理場に行った。

「これは絶対流行るぞ。そしてこれがカレー粉か」
カレー料理を食べ終えたダヴィト伯父様は、カレー粉が入った瓶を手に持ち感想を口にする。
「このカレー粉の入った瓶はもらっていくよ。販売するまで時間があるだろうし、これくらいの役得はないとな」

ダヴィト伯父様は僕に笑いかけて、機嫌よく帰っていった。
あぁ、苦労して手に入れたカレー粉の瓶が4つになってしまった。
1つはクリス兄様に渡そうと思っているからあと3つになる。
カイル隊長たち騎士団にもあげたいのに……残りは無事に持ち帰りたい。

翌日、侯爵家の次女、ブリジット・カールトンから手紙が届く。
「面白そうなことをラファエルと2人でしていて、仲間外れは悲しいわ」というような内容だった。
相変わらずの情報通だよ。
しかも手紙の最後の方には、「知らせたいことがあるので明日訪問したい」と書かれている。
返事を待っているカールトン家の者に、了承の旨を書いた手紙を渡した。

やってきたブリジットは、一人ではなく男性を連れていた。
お兄さんか？
「初めまして、従弟（いとこ）殿。アイザック・ノーストレイドだ。ブリジットの婚約者でもある」
はぁ～、従兄？　婚約者？
僕は慌てて挨拶をし、屋敷にいるクリス兄様を呼ぶように、部屋の隅に控えている侍従のジョルジュに指示を出した。

「うふふ、驚いてくれたかしら」
ブリジットはどっきり大成功！　といった雰囲気で楽しそうだ。
「アイザック、いきなりどうしたんだ」
事情がわかっていないクリス兄様が、慌ててやってきた。
従兄のアイザック兄様は、クリス兄様の一つ年下だ。
同じく従兄のユベール兄様は、ジェラ兄様と同じ年だ。
年が近くて羨ましい。
「アイザックの婚約者って、カールトン侯爵家の長女ではなかったのか？」
ブリジットを婚約者だと紹介されたクリス兄様が困惑していた。
カールトン侯爵家の長女は、現在ソレイユ帝国に留学している。
その留学先で帝国の公爵家の次男が、一目ぼれをしてアタックしてきたそうだ。
自分には婚約者がいると断ったが、あきらめきれない次男が両親を説得して、ノーストレイドとカールトン侯爵家に、婚約させてほしいと願い出たらしい。
「姉もまんざらでもないみたいなのよ。公爵家の次男だけれど、母親の実家の侯爵家を継ぐことが決まっているの。我が家としても帝国と縁ができるから悪くない話なのよ」
ブリジットの話を聞き、アイザック兄様の方を見ると、苦笑いしている。
「家業と学業の両立で忙しかったし、彼女も留学しているから、交流があまりなかったんだ。だから彼女に対して何か思いがあるわけではない」
アイザック兄様が淡々と語り、話は続く。
「ブリジットと話をして、我が家にはブリジットの方が合うと思ったから、彼女と婚約する形で了承したんだ。今回の件で帝国とのパイプも強くなるから、我が家としても悪くない話だ」
アイザック兄様は、茶目っ気たっぷりにそう締めた。
「私もアイザック様との会話は楽しいし、凄く年下のわたくしを一人の女性として扱ってくれるの。わたくしの性格って男性によっては生意気とみられるから、このチャンスを逃したくないのよ」
ブリジット、婚約者本人の目の前で言いますか。
まぁ、惚気（のろけ）にも聞こえるが……。
「だからね、婚約祝いにカレー粉を頂戴。ダヴィト様に渡したのだからまだあるわよね」
今日の目的はカレー粉狙いだったのか。
ここは反論しなくてはいけない。
「婚約祝いなら、ラファエルからもらってよ。公爵家で作っているのだから、数がない我が家から取っていかなくてもいいじゃないか！」
「ほら、あるのでしょ。親戚になるのだからケチなこと言わないでよ。学園に通い始めたにもかかわらずアイザック様が忙しい原因は、リーンハルトのせいでもあるのだから」
クリス兄様とアイザック兄様は、苦笑いしながら僕たちのやり取りを見ているだけだ。

結局言い負けした僕は、カレー粉1瓶をしぶしぶブリジットに渡す。
「リーンハルト、ありがとう。家でカレースープは飲めたけれど、量がないから分けられないと、ダヴィト叔父上に断られたんだ。この話をブリジットにしたら、婚約祝いをもらいに行きましょうと言われてね」
アイザック兄様が種明かしをしてくれた。
原因はダヴィト伯父様だったのか！
カレー粉が2瓶だと足りない可能性がある。
ここはもう、ラファエルに手紙を書いて、カレー粉の追加のおねだりをしつつ、ブリジットの婚約についても伝えよう。
おねだりの手紙を書いた翌日、ラファエルからカレー粉が12瓶送られてきた。
ラファエル、なんて気前がいいのだ!!
さすが我が親友。
余裕ができた僕は、迷惑をかけているっぽいノーストレイド家に追加で2瓶。
クリス兄様にも追加でもう1瓶渡した。

「ハルトも知っている私の友人3人を、食事に招待していいか？」
夕食時にクリス兄様が、友人を招待したいと言った。

クリス兄様が学園を休んでいる際の授業を、ノートにまとめてくれていたらしい。
お礼は何がいいかと尋ねると、クロンデール公爵家との共同事業の料理を、発売前に食べたいとリクエストされたみたいだ。
クリス兄様の友人3人は、魔力レベルを上げるため、休みの日はダンジョンへ行ったりしているらしい。
クリス兄様には迷惑をかけているから、カレー粉1瓶を出しましょう。

◇　◇　◇

学園が休みの日にメイベル侯爵家の長男――ラインハルト様、ザガリー伯爵家次男――マクスウェル様、ローザリンデ伯爵家の長男――ジャレット様がやってきた。
クリス兄様に呼ばれたので、僕は3人に挨拶すると、クリス兄様が話しかけてくる。
「マクスウェルがハルトに相談したいことがあるそうだ」
「リーンハルト君、君の従魔を貸してくれ！」
「えっ!?」
思いもよらない話で、僕は間抜けな返答をしてしまう。
クリス兄様が、苦笑いしながら僕に説明してくれる。
マクスウェル様たちはダンジョンに行っているが、高位魔獣と対戦したことがない。

だから樹海に行った時、足手まといになることを懸念しているらしい。
そのため、実戦を見据えた練習をアトレたちとしたいということだった。

僕は可否を聞くため、アトレたちを探しにいく。
アトレ、シエル、ビアンカは、庭で魔法を使って遊んでいた。
アトレにマクスウェル様の話をしたら、みんなやると言ってきた。
シエルとビアンカを見ると、シエルは羽をバタバタして氷を空中にまき散らし、ビアンカは風魔法を飛ばしてアピールしてくる。
やる気マンマンじゃないか。
昼食前に1回対戦することになったため、騎士団の訓練場に移動する。
アトレ、シエル、ビアンカ対マクスウェル様たち3人だ。
最初マクスウェル様が、アトレたちに向けてウォーターボールを放つが、ビアンカがウィンドカッターで一刀両断。
今度は3匹に向かってウォーターボールを3つ同時に放つが、シエルは飛んで避(よ)け、アトレとビアンカが風魔法で、3つのウォーターボールをマクスウェル様に向けて弾き返す。
ジャレット様が防御魔法で、弾き返されたウォーターボールを防いだ。
今度はラインハルト様とマクスウェル様が、アトレたちに向かって、ファイヤーボールとウォーターショットを同時に3つずつ放つ。
しかし3つのファイヤーボールは、アトレとビアンカのウィンドカッターで蹴散らされ、シエルが3つのウォーターショットに向けてアイスボールを放って潰した。
シエルは成獣だからわかるが、アトレとビアンカってこんなに強かったの？
だからアトレから、エミニーラダンジョンでもっと討伐したかったと、恨みがましく言われたのか。

昼食は、リクエストされたカレー料理だ。
アトレたちも、彼ら専用の机でカレー料理を食べている。
カレースープをガン見してから一口飲んだラインハルト様が、驚いた顔をする。
「これは癖になる味だね。今まで食べたことのない味だ。流行るだろうな」
ラインハルト様がそう言うと、ジャレット様も続く。
「お肉も調味料が変わるだけで、こんなに味が変化するなんて凄いよ」
「美味い。それよりも午後も師匠たちと練習できるよな。まったく歯が立たないなんて。もっと善戦できるかと思っていたのにな」
マクスウェル様、いつからアトレたちはあなたの師匠になったのでしょうか？
午後からも、訓練を繰り返したが、うちの子たちは元気いっぱいだ。

ウエストランドに戻ってからも、魔法師団に訓練を頼んだ方がいいのだろうか？
頻繁に樹海へ行くわけでもないから、アトレたちにあとで聞いた方が良さそうだ。
「いい練習になったよ。まだまだだわ。師匠たち、ありがとな」
マクスウェル様たちは満足そうに、笑顔で帰っていった。
アトレたちも師匠と言われて気分が良さそうだ。

新規事業の手続きが終わり、やっと僕たちはウエストランドへ戻ってこれた。
僕は王都の屋敷で読書三昧の生活。
だって僕が「王都の観光でもしようかな」と呟くと、父様やジョルジュからの「どこにも行くな」という無言の圧が凄かったから。
新規事業の手続きに思いのほか時間がかかったため滞在は延びたけれど、僕にとってはいい時間だった。
まぁ、父様が汽車の中でぐったりしていましたが……お疲れ様でした。

◇　◇　◇

「遅い」
帰ってそうそう精霊のアルラウネに捕まり、文句を言われた。

立ち読みサンプル
はここまで

「まだ、いたの？」
アルラウネは宙に浮いた状態で、両手を腰にあてている。
「シエルに乗って帰るのに、シエルも一緒に行っちゃったら、帰れないでしょ！」
あぁ、そうだった。ごめんよ。こちらが悪い。
ここは素直に謝る。
「まぁ、いいのよ。ママさんがクッキーやケーキとか、甘いお菓子を食べさせてくれたし、魔法水も隊長さんからもらえたしね」
なんだかんだ言って、楽しんでいるではないか。謝り損だよ。
よく見るとアルラウネが着ているワンピースのスカート部分に蝶々の刺繍がしてある。
「着ている服、作った服かな？」
「そうなのよ。リーンハルトたちが帰ってくるのを待っていた間に1つ完成したの！」
アルラウネが僕の目の前で、ゆっくりと回ってドレスを見せてくれた。
「1つ？　いくつ作る予定？」
「あと2着。ママさんはもっと作ってもいいのよと言ってくれたけれど、置く場所がないしね。でもママさんがドレスを入れる箱を作ってくれるって！」
僕の部屋にもアルラウネはついてきて、滞在中の話を嬉しそうに語っていた。
翌日、アルラウネはシエルに乗って世界樹に帰っていったが、また別のアルラウネを乗せて戻っ